

2月学習会のご案内

平成26年2月12日

みなさま方、いかがお過ごしでしょうか。今月も案内がぎりぎりになってしまい、申し訳ありません。そして、内容についてもまだ最終決定しておらず、未定となっております。重ねてお詫びいたします。決まり次第ホームページ上にはアップします。そちらの方でご確認いただければと思います。メール会員の方には、再度連絡させていただきます。事務局の不手際でご迷惑をおかけします。お許しください。

先週の大雪の話題を少し。ひさしぶりの大雪で、雪遊びに連れて行って欲しいとせがむ我が家の子どもとなかなか機会のもてない私としては、まさにわたりに船の出来事でした。朝から眠い頭を振り起こして、服をたくさん着込んで近くの公園へ出かけました。そりも持って行きました。子どもたちはおおはしゃぎです。雪だるまを作ったり雪合戦（というより雪のぶつけあい）をしたりとずいぶんと楽しむことができたようです。しかしながら、そりはいけませんでした。あれは傾斜がある場所でこそ生きる道具です。平地では親いじめとしか言いようがありません。下の子がせがむので仕方なく、平地でそりを引っ張って遊びました。雪国の昔の郵便屋さんはこんな感じなのだろうかなどと考えつつ、公園の中を何周かしました。その後の自宅前の雪かきと相まって未だに腕が重い始末です。何があっても、今後、そりを公園へ持って行くのはやめようと思います。

さて、語る会1週前の2月15日（土）は附属小学校の実践発表会です。今回は、難波香織先生と私、小出が発表いたします。二人とも「書くこと」の実践について見ていただこうと思っています。詳細につきましては、同封した案内をご覧ください。当日受付でも問題ありませんので、ぜひおいでください。よろしくお願いします。

なお、引き続き駐車場及び会場が東山ランチへ変更となっております。お間違いのないようにお越し下さればと思います。本年もよろしくお願いします。

日 時	平成26年2月22日（土）9:30～12:00
場 所	岡山大学教育学部附属小学校 教師教育開発センター東山ランチ2F中会議室 ※場所にご注意ください。駐車場の敷地にある建物です。 TEL(086)272-0511 FAX(086)271-3455
連絡先	小出 真規（こいで まさき）TEL 090-5704-7339 m-koide@okayama-u.ac.jp（学校パソコン）
内 容	未定
発表者	未定

<お知らせ>

- ※「おもしろ見つけ」の本を、附属小でお取り扱いしております！来られ前に冊数をご連絡ください。代金引換となります。（特価！）多くの方に手にとっていただけるように、みなさん！宣伝活動がんばりましょう！

※ 駐車場について

駐車場は「教師教育開発センター 東山ランチ」になります。「実践センター」という呼び方がかつてしていたところで、学校の南西にある建物です。よろしくお願いします。わかりにくいようでしたら、当日朝、小出の携帯にご連絡いただければと思います。



1月の学習会の報告

(文責 小出真規)

田中先生より

○三省堂4年の教科書にのっている「冬の満月」について

作者が70才半ばで書いた詩で、大学生にテストをしたが、大学生も読めない。この詩は、作者が満月を見て、それに自分の状況を反映して満月を見ている作品。詩の中に「もしも・・・」と表している部分があるが、そこから、自分はまだできていないという思いが表れている詩で、そういうところが読めない。2割くらいしか読めない。後半は現在の私の姿ですか、という問いに対して、「そうです」(誤答)が7, 8割で、読めていない。やさしい言葉だけど、簡単な作品ではないが、大学生であまりにも読めないのは深刻な事態。

見方の詩教育(足立悦男先生)

どういう思いをその作品に込めているかというのが鑑賞指導で、もう一方の流れで、詩の表現技術があるが、そうではなくて、詩人がその作品に描いている対象をどのように認識しているか、そういう見方を学ぶということを意識する必要がある。

技法の学習と詩を味わうとは別物。技法の指導がいらないわけではない。どういう技法に基づいて書かれているかということを読んでいくことは大切。なぜそう感じられるかということも大切。ではあるが、技術を目的化して教えることになると感じることはできなくなる。

高校などで出てくる詩はそもそも読むことが難しく何を書いているのかわからないということもあるが、小学校で出てくる詩は、普通に読めば、表面的に読めば分かる。何を目標にして授業を組んでいくかというところは考えどころ。見方、感じ方どちらにウエイトを置くかは作品によってくる。詩教育を一律で行ってしまわないようにする必要がある。

「もしも」のところに着眼して「見方」を学んでいくようにしていくと、高学年や中学校の教材にふさわしいということになる。また、必ずしも、その学年で学習するのが妥当かどうかとも検討が必要。

○日本国語教育学会について

この会を部会として申請することもできます。が、学会員数がちょっと少ない。現在岡山県で58名。今後、100名を目指したい。学会員の勧誘をお願いします。再来年は岡山で西日本集会がある。

小川先生より

○学会誌について

毎月の学会誌が勉強になる。幅が広い。自分の脳みそが狭くなっているときに視野が広がる。

夏目漱石から芥川龍之介への書簡で「われわれはとかく馬になりたがるが、牛にはなりきれない。」よくわかる。あいさつで一番きらいなのは「忙しいね」本当は忙しくないのに忙しいと言っているのを聞くとさみしい気持ちになる。心の中で忙しいは禁句にする。

1年生に「早くしなさい」は言ったことがない。最初の1年はしたが、1年生の2年目からは、「早くしなさい」と気持ちを聞く発問はしていない。そういうところが大切。

学力状況調査について

丸つけをしてみた。悲劇です。5年3学期と6年1学期の差もある。ここでぐっと変わってくところがある。もう一つは、丸ごと読みがB問題に耐えられるのか、ということ。ちがう気もするし、重なっていると思うところもある。重なっているというのは、「天気を予想する」でいうと、つなぎ反応で、キーワードに反応してつないでいく読み方をする。それを板書していくと構造化されていって、どれが、キーワードでその具体になっているかということがわかるということ。厳しいなと思うのは目的的に読むということ。この情報から何を吸い取るかという立場になってくると、おもしろ見つけや丸ごと読みがどの程度機能するのかということが、これからの課題。B問題の終わりの説明文はかなり高度なもの。学力調査も否定的に見るばかりでなく、問題がどのような構造になっているかということをもたには考える必要がある。

磯野先生の発表について

私たちがしているおもしろ見つけや丸ごと読みは、言語生活にいきる国語教育。国語教室の国語教育ではなく、言語生活に生きる国語教育で、豊かな読むこと、書くことになっていくか。それがトップにある。それがこの会の主旨。手法に進んでいくと、こういった呼び戻しがある。読書と国語教育がどうつながっているのか。もっというと2次の学習と3次の学習がどのようにつながっているのか。そういったことが定期的に点検されていくと、筋の通った教育が展開されていく。磯野先生の発表後に話題にしたいのは、2次と3次をどう構想しているか、そのときのポイントは何か、読書指導はどうしているか、というあたりが話題になるといい。

磯野先生より発表

当日の資料をご参照ください。

○壬生先生より

学校の実態として長い文を読めない、書けない。何を問われているかわからない。これからどうするか。図書の時間の半分をどうにかしていけないか、という話になっていたが、図書の時間の中身を考える機会になった。担任が楽をする時間ではなくて、これからは、こうした反応を楽しんでいくような指導を図書の時間に入れていきたい。

○田中先生より

同じ作品をみんなで読むという点では、同じ本がないといけないというところは、ウェブ上の青空文庫を活用する方法もある。但し挿絵はないが。

○野崎先生

低学年は本が好きなのに、中学年から段々と読むというより見る本が多くなって、高学年でもその傾向が続いている。読み聞かせから次の手立てがないままきいている。家庭でも同様。だからこそ、学校での授業の時間を使って引き上げていくことが必要だと感じた。

図書の時間は担任も気を抜いてしまう現状で、読書の指導を入れていかないといけないと感じた。

短い期間でここまでされたということについて、段階を踏まれてできていったんだなあ、できないからしないではなくてできるように段階を踏んでいくことが必要だと感じた。

○田岡先生

質問を二つ

① 2ページの読書記録カードについて

（磯野先生より）表になっていて、子どもが見つけた反応を書いていくというタイプ。段々と子どもが書いているところが増えていくようになっていく。次々とどんどん書き足していく。感想を書く欄もあるが、書かず時間を取りすぎると読む時間がなくなる。

② 4ページの上 豆太のところで、どんな反応があったのか。

（磯野先生より）子どもが読んだ瞬間に思う言葉が出てきている。豆太はかわいそうだな、弱虫だなあ、びっくりしたよ、心配だななどが出てきていた。授業では、3つ（弱虫、やさしい、勇気がある）以外も見つけたら書いていいんだよと言っていたので、この授業では実験的にいろいろなことをしてみたので、ワークシートを二人組で思ったことを書き込んでごらんなど、頭の中で子どもにどうやってイメージを形づくらせたらいいかを考えていろいろやってみた授業。

感想

子どもは付箋で反応を積み重ねながら読んでいく。実感しながら、かみ砕きながら読んできたからこういう物語の世界を自分なりに構築できてきたのか、それとも、子どもがこの物語の世界を作る時に、反応を積み重ねてきながら、ちょっと段差があってもできるのか、それとも自然に反応を積み重ねてきたら、こうなるのか。

（磯野先生より）段差があると思う。自分が同化してその場面に入って読んでいくと、自分がその場面にいる。物語世界を構築するとはファジーなことで、その世界を自分でイメージできれば構築したということにはなるが、長編を読んでいると、ここの国で起こったこととこっちの国で起こったことがリンクして書いてあったり、互いに別の時間枠で起こったことがリンクするように書いてあったりする。そうすると同化しているだけでは読めなくて、つなぎ反応という言葉で表しているが、つながりが読めるようにならないといけない。そこに同化して読むとは段差がある。今回は3年生でこういう長編を読んだことがない子どもたちで、反応のレベルも高学年の枠にあるもので、そこは教師が手助けしてやる必要がある。黒板に絵を貼って、場面を整理するなどする必要がある。気付いて読めるようにしていく。気付かないとわけがわからなくなる。

（田岡先生にもどる）

子どもがどんな長編を読んでいるか気になって見るが、ゲーム的になっている本をわりと子どもが借りて読んでいる。そういうのでも子どもが長編を読むのだからよしとするのか、それでいいのかどうか、子どもが興味をもったものでいいのか、もしくは、こうした物語があるものがあるのか。

（磯野先生より）そうした本も字で書いてあって、県立図書館で並んでいる本を見れば、最近では表紙も子どもの興味をひくものになってきている。ただ、本当に子どもがゲームを楽しんでいるのと、本として言葉を介して読んでいるのとは、言葉で表現しているという点でプラスはあるのではないかな。

○小寺先生

長編の読み方 付箋を貼っていく、書き込みだけではない。新しい発想になった。

○村田先生

読書をする子が学校評価アンケートの結果から減ってきていることがわかってきている。家での取り組みを啓発してきた。前任の司書の先生の時間外勤務のおかげもあった。時間をかけて働きかけると子どもが読むということはわかっているが、決まった時間の中でもできるということが今日はよくわかった。また、家で読むということは、読書のライバルが多すぎて、どうたたかいたいくかを考えないといけない。もしくはゲームをライバルとせず、ゲームから読書へ結び付けていくか、いずれにしても、学校から帰った子どもの時間をどうしていくかも考えていかないとはいけない。

どういったら家でも読書できるかを語るには、読書の効果を具体的に語れると、保護者も働きかけが強まると考えた時に、今日はヒントが得られた。読め読めという前にやるべきことがあるということ、読書指導について考えるいい機会になった。

○赤木先生より

付箋紙が有効ということは言われてきたが、子どもが貼った付箋紙はその後どうするのか。

(磯野先生より)

ワークシートにはっていくようにしていく。または、たくさん貼ればいいということで、書いて貼ったら、缶に入れていくという方法も行った。書かせるということばかりに力を入れると、読み進めるということがしにくくなるので、本当は、読み進めていく中で頭で考えていることであって、最終的な感想になっていくものだが、その過程をメモしていく、友達と共有するということが大切。

○小出より

反応を自覚化するひけつは？

カードに子どもの言葉で書いてはっていったら、見えるところにあるので、子どもが使いやすかった。全体場で発表するときもそれを教師が使いながら、自覚させていった。

もう一つは、そうやって反応することがおもしろくないといけない。ただするのではなくて、子どもの実感がともなっていないとダメ。ただただ、これは〇〇反応というのではダメ。

物語の難しさをクリアするためにされた工夫

カタカナの主人公で、しかも入れ替わったり、しかも呼称が変わったりしてこんがらがるところがある。そこがわからなくなる部分。だが、そこが反対におもしろい。みんなで確認しながら読んでいくと、実感をもたないながらもおもしろいと感じるつづやきが出てきた。難しさの反対にあるおもしろさがある。伝記のように時系列で流れる話ではなく、入り組んで書いてあるのが仕掛けでおもしろさでそこが読めるといい。付箋ではなく頭で作りながら読めるといいと思うところ。

○赤木先生より

磯野先生とは同期で、そのころからすごい人。光村図書も読書に力を入れようとしている。1年「だってだってのおばあさん」2年生「わたしはおねえさん」4年「初雪のゆる日」これらは、2次を簡略もしくは、なくてもいいと考えていて、読み終わったすぐの感想である「読後感」を相手にすればいいという発想で組み込まれている単元構想の教材だが、それに対してどう扱っていいのか分からないという先生方からの反応と限られた話しか扱えない教科書で、なんでこんな軽い教材を扱うのか、価値はどうするのかという意見があるが、編集の中でも二つの考えがある。

子どもが読むということを楽しむということ国語の授業の中できちんと保証していくことを考えないといけないということは共通項。伝統教材と言われる誰が読んでも揺るぎのない価値があるような話とはちがう、読んだ後に何か心が動くといったような教材でも授業をきちんとしていかないといいところに対する提案だったかなとも思う。

清心附属小学校では、読み聞かせによく行くが、清心は朝は毎日朝読書、業間前はドリル学習、5校時の前は、担任に任せられていて、朝読書では長編を読んでいくこともできる、1週間のシリーズで考えるなどして、読み聞かせに行く人がいいと思うものを読む。1年生でも毎朝読むということでもぼつぼつとつながっていく。土日をまたいでも、子どもたちの中ではつながるということを考えて、今日の提案にあったように、長編ということをもっともってきて読んでほしい。

今日の提案は、おもしろ見つけの原点のような気がする。モチモチの木、やさしい、弱虫、勇気があるといった視点で読む以外でもいいよ、それ以外でもいいよ、どんな反応でもそれをする自体に意味があるよとするところに意味がある。おもしろ見つけは収束型ではなく発散型の思考。反応することに意味がある。モチモチの木は教科書教材なので、最初に一読したら、最後まで読んでしまっ

てドキドキ感がなくなってしまう。2次でこの場面ということになると感じなくなってしまう。子どもたちが最後まで読んだ後の直観をまとめるとこんな感じ（前述のような視点）になるということになるが、長編だと、初めて読んで次を知らない。それが、逆に自分のおもしろ見つけ的に見つけてきたものを初めて読むので、読んだ感想を付箋に書いてグループで出し合うということをしていたら、または、こんがらがるところは先生の問いかけで解決するようにしていたら、シンプルな反応で解決できる気がする。今までのおもしろ見つけの傘に入るものと入らないものがあるという話があったが、目的的に読むというシンプルなもともとの柱と見つけの発想に近い授業が2次ではなされたのかなあと感じた。

小学校の長編は、わざわざその作品の価値といったようなものを扱わなくても、感想を出すというようなことをしていったら自然に感じるできるようになっていくのではないかという感じもした。読み通すことに意味がありそのことが自信になって次につながっていくということも国語が担当していくところ。苦手な子どもは、帯単元でしてきた反応が積み重なっているの、それが使えるかなということで読み進めることができた。得意な子はもともと読み進めることができるが、自分は読めたんだけど、それはこんな反応をしてきたんだなということで読み進めていくことができていたと考えられ、子どもの豊かな言語生活ということに寄与していく実践になっていた。

教科書の教材であっぴあっぴしていたら、こういったことをする時間はない。そちらをシンプルにしたり、行事の練習を国語の時間にすることがないようにして、学校全体で取り組んでいかなければいけないと感じた。

田中先生より

実験的な授業、帯単元というところなどについて。授業は常にそうでないといけない。マニュアル通りすればいいという発想はまちがい。常に挑戦していく。その挑戦は、子どもたちにどうなってほしいかというゴールをもちながら、そのゴールもどんどん修正されていくのだろうが、イメージをもちながら、どうするのか考えてそのために実験的にやっていく。それを日常的にやっていく。研究発表があるから、急に考えて理論武装するというのではなく、日常的に考えていけばそう苦にならない。道歩きながらご飯食べながら、テレビを見ても本を読んでも、考えていて話が繋がってイメージできるようになってくれば、子どもがこんなふうに読んで欲しいなということを考えていけば、授業のアイデアが出てくる。今回の実践で言えば、ドキドキというより、ワクワク。「ごちそうさん」で言えば、のりこさんが、結婚式を自分の家でしたいと言い出すところがある。時代的に普通はおかしい。おかしいと考えたら何でかということが見えてくる。お姉ちゃんの結婚式を同時にするだとか、そういうことが見えてくる。読めるよねといいながら見ている。予想しながら読むというのは環境の中にあれば、だんだんできるようになる。予想読みという言葉で意識化する必要はないが、先どうなるのかなという予想をたてながら、読んでいく能力自体は身に付けていったほうがいい。長編読書をしていく上でも必要なこと。こうしたことを日常の中から考えてやっていくということがあれば、毎時間が実験的な授業であってもいいのではないかなと思う。

読書指導という話があったが、そもそも国語の読むことの授業は、全部読書指導。読書という広い能力をつけるために、国語の授業の読解の授業がある。読解鑑賞がゴールではなくて、日常生活の読書（物語だけでなく様々）に対応できるように読書指導の時間があると考えると、当然長編読書もできる子、大人になってほしいと考えると、長編読書に対する指導も考えないといけない。

今日の実践は、教頭職という制約から必然的に帯単元になったところがあるのだろうが、読書と考えると、通常でも帯単元という選択をしていくということがあっていいのではないかな。小川先生がされた忙しさ云々という話は、私も恩師によく言われていた。忙しい云々で仕事を断ってはいけない。恩師はすごい忙しい中で学生指導や論文を書く人だった。入ってくる仕事は断れないですね。ですが、校長になってみて一方で、現場の教員は年々忙しくなっている。あれもこれも、生徒指導にも時間がかかる。案件もどんどん増えていっている。教員自身が身が持たない。倒れてもおかしくない。仕事だからなんとかしないとけないと簡単には言えない。教員はいやおうなくしなくてはならない仕事が増えている現状で、図書の時間をどうするか。

何を優先するのか、キャパの問題。忙しさを理由に断ってはいけないが、絶対にできない量というものはある。どれが優先されるのか、国語の授業で考えると、日常生活における言語能力を育てることが任務と考えたとき、図書の時間は手を抜けるところではない。読書指導をメインに国語の授業を組んでいくということを考えて行く方がいい。おおぐくりにするところは、単元構想の中で考えて臨機応変に考えて時間を使っていく必要があると考える。

読書指導のアイデアとしては、今まであまり相手にされてこなかったもので、国語の読解の授業としては、私も導入することにあまり好感をもっていなかったもので、アニメーションの取り組みがある。

アニメシオンの取り組みは作品を大つかみでとらえていくという点で有効に働くところは大きいにある。評価を前提として学力を付けるということでアニメシオンの方略を全面的に持ち込むというところではむしろ賛成できない側面があるが、日常読書につなげていくということから見れば、アニメシオンの様々な作戦は上手に使っていくことができる。それらも使っていきながら、アニメシオンは表層的なゲーム的なところがちょっと強いので、それらが取り入れられた形で出てきているのがリテラチャー・サークルやブッククラブということで、吉田新一郎先生が中心的人物の一人だが、そういうところも参考にしながら、読解の学習と読書をつないでいく進歩ということも出てくる。

今日の話で、小学校から中学校への指導事項（2ページ目）が出てきているが、これは考え方とすれば、学習指導要領に出てくる指導事項というものは、そのころに中心的に指導しましょうということだが、できるようになるとはちがう。次のステップでだんだんとできるようになってくる。いわゆる指導目標と到達目標という意味でいうと、ここに出てきているのは到達目標で、指導するのはもっと早くからしていてもいい。例えば、登場人物に関する項目が一つ目に出てくるが、これを低学年には、3、中学年には4と見ていくと、数が増えてしまう。数が増えると覚えられないので、あきらめてしまい、いい加減になってしまうということがあるが、整理して見ていくと登場人物に関するものはずっとある。なりきって見ていく→焦点をあてて見ていく→関係をとらえていく、となると一連の流れになっている。登場人物という項目で、低学年から中、高学年と見ていけばいい。別のことでいうと、「場面ごとに…楽しむ」ということが、低学年の3番目に出てくるが、これは中学年の4番目の「読む視点を次へ次へ…楽しむ」につながっていているし、高学年中学校のところでみると、3番目の「時間や空間の枠を作り…構築する」につながっていている。場面の関係をとらえるという項目でとらえておけばいい。物語を読む時にこんな観点をおさえておけばいいんだということになる。全部で3つくらいになる。物語の情報駆動、ストーリー駆動という話をしてきたが、場面、ストーリー、自分とのかかわりということを見ていくと整理して見やすい。4年生だから、中学年の後半だと単純には学級は見られない。下の段階の子もいる。進んでいる段階の子もいる。4年生だからというふうに見ていくと、個への対応が難しくなるので、場面というふうにして、この子はこの場面の系列のなかでここまで出来ているととらえると、どんな支援が必要かということが見えてくる。

今日の作品のホッツエンプロッツは本当は4年生くらいでということでしたが、帯単位ということからすると、読みの反応を積み重ねていくということからすると、3年生だからすうっと入っていたということもある。作品自身はレベルが高いということはあったかもしれないが、ちょっとくらいレベルが高いのは、案外乗り越えていけるもの。学習効果が高い。はねかえされると無理だったねということになるが、今回はうまく機能していると思える。

子どもたちが読む作品の長編が時代とともに変わってきているという話があったが、私としては、抵抗したい。迎合するのではなくて、まあ、本当はそれでいいのかもしれないが、国語の教育をしているということからすると保守的であっていいと思っている。三省堂の6年で「紅鯉（べんごい）」という作品があるが、これは古い時代の作品で、あれくらいの長さの作品が読み続けられるようなイメージを子どもの成長の先に見据えていきたい。ああいうものが残っていることが大事とは思っている。

小川先生が「本を読む本」紹介をされていたが、4つの読み方が出てくるが、今日の話との関係でいうと、そこに出てくる読書は、物語の読書を前提としていない。日常の読書という視点からとらえていくとそういう視点からとらえていくことが必要という話だったと思う。

読書促進プロジェクトということを大学でやっているが、その初期のころ、子どもの読書傾向の調査をまとめたことがある。小学校1年生でもちょっと刺激をあたえるだけで、読む量が2、3倍になった。中学年の文字中心のものも読めるようになってきた。読み聞かせから文字中心の読書への移行には課題があるが、そこへアプローチするというのが今日の課題であった。ちょっとのアプローチで子どもたちが変わる。半月の取り組みで変わっていくということを結果として出してくれたことは、やればできるという確信をもって実践に取り組んでいくことが大切ということを示してくれた。

付箋をはっていったものをワークシートにまとめていくというあのアイデアは、丸ごと読みの授業でいうと、教科書レベルの長編で、全文を掲示していくのが難しいということに対して、一定の可能性を示してくれているのではないかな。赤木先生の以前のやまなしのワークシートもあったが、原文にそいながら、気付きを付箋に書いてはっていき、それをワークシートに出していくということで、板書にも使っていくということに可能性がありそう。子どもの付箋紙はそのまま見えない、拡大はできない。そこに入ってくるのが電子黒板。附中は電子黒板を入れることになった。普通教室に全部、電子黒板を入れる計画。経費的に出せない額ではなくなってきた。これから入ってくる。子どもが書いた小さい付箋紙を学級で共有して見るということにも役立ってきそう。子どもたちの育てたい能力に資するICT化が進んでいくとよい。ICTのためのICTではなく、ないときには手間がかかってきたものがICTが入ることによって簡単に実現できるということになっていくとよい。